

小説

柴胡が原

ゆとろ 満

一足早くウォーキングから戻った東彦が自宅の前の道路に落ちた柿の若葉を掃いていると、妻の弘子も帰って来た。いつもより遅い。「どうしたのだろうか」と思い、彼女を見やると、ゴミがいつぱいに詰まった大きなビニル袋を抱えている。

「一体そのゴミはどうしたの」

東彦が怪訝そうに尋ねた。

「それがあなた、感動したのよ」

東彦の頭にはそのゴミ袋と感動という言葉が繋がらない。しかし、妻の飛躍した、脈絡のない話しぶりには慣れていたので少しも驚かない。

「朝から感動とは幸先がよいじゃない。何が起こったのよ。」

宝物でも見つけたのかね」
「からかわないでよ。私、本当に感心したのだから。相模原にはステキな人がいるのね」
東彦は、早朝の慌ただしい時間帯に、妻の感動話にゆくり付き合っている余裕はなかった。しかし、この「大事な感動話」に耳を貸さなかつたら後でどんな恨み言を言われるか分からない。ここは妻の話を聞いてやるに越したことはない、と判断した。

「一体どんなステキな人と会ったのよ、聞きたいね」

東彦は手にした箸の動きを止め、さも好奇心があるかのように尋ねた。

弘子は東彦の気遣いなどには無頓着である。しかし、夫

の真剣な対応が素直にうれしかったのだろう。その証拠に顔をほころばせている。

東彦たちの自宅は野球場やテニスコート、それにアイススケートのリンクを併設した公園のすぐ近くにある。高校野球の試合の時などには応援団の太鼓の音や拍手が手に取るように聞こえてくる。また、夜間の照明灯は二階のベランダから手が届くと思えるほどである。公園は樹木が多い。その中に入った途端、空気が一変する。真夏でもひんやりとし、深呼吸をすると新鮮な空気でも心も洗われる思いである。青葉若葉が生い茂るこの時期は全身が緑に染まり、樹林の一部と化するような爽快感を覚える。自然が与えてくれる肺腑に染み入るような清々しい空気、緑の若葉を通して差し込む陽の光はただただ人の心を幸せにするのである。思わず「ありがとう」という言葉が口から漏れるほどである。早朝の六時は殊の外、春の華やぎを享受することが出来る。あたかも春を背負ったのジョギングのようである。

この公園にはジョギングコースが設置されており、一周およそ二千メートルほどである。鳥の数や種類も多く、希に蛇の姿を見ることがさえる。しかも隣接して「銀河の森プレイパーク」もある。この森には人工物は少なく、自然林とわずかな広場があるだけである。鬱蒼とした森は貴重である。緑のオアシスといってもよい。さらにこの森の前の道路を

挟んで博物館がある。館には常設展示室、プラレタリウム、天文研究室があるが、何ととってもこのプラレタリウムは必見である。ドームいっばいに広がる映像の全周映画が上映され、星座の観察などができる。また、樹木が博物館を覆うほどに生い茂り、来館者を癒やしてくれる。その上、博物館の向かいには宇宙科学の最先端研究所がある。しかも予約無しで見学ができる。内庭に展示されているロケットは耳目を驚かせる。この他に小中高校や短大もあり、この一帯は知と緑のゾーンとも言える。

しかし、最も身近で市民が親しみ、利用頻度の高いのは公園である。早朝からジョギングやウォーキングする人たちは多い。また、ラジオ体操も行われている。土日や祝日などには親子連れ、若者たちが沢山訪れ、遊びに興じている。東彦夫婦も毎朝ウォーキングにいそしんでいる。と言っても二人は一緒ではない。東彦は六時半からのラジオ講座を聴いている関係上、妻よりも早くに家を出、早くに帰宅する。妻は仲間たちとウォーキングとラジオ体操を行っている。妻が言うステキな人に出会ったのは、このラジオ体操が行われている場所であった。

ラジオ体操は駐車場と硬式野球場の間にある広場で行っている。自主的に運営され、参加は自由である。リーダーが持参したラジオの放送に合わせて皆が体操を始める。こ

ここには原初的自治の姿が見える。

弘子がいつものように体操開始に備え駐車場に向かった。すると、トイレ周辺に散らかるゴミを拾っている六十過ぎと思われる女性の姿が見えた。公園にはゴミ箱はない。ただし、自動販売機には缶やプラスチックボトルなどを捨てる専用のボックスが設置されている。公園に来た人の中には、ゴミをこのボックスの回りに放置していく人がある。

この日は日曜日の翌日とあってか、かなりの紙くずや弁当カトラが散乱していた。女性はそのゴミを丹念に拾って、持参したビニル袋に入れていたのであった。弘子は「あっ」と思い、自分もやらねばと思った。しかし、ラジオ体操の放送が始まっている。申し訳ないと思いながら体操を始めた。体操が終わったら一緒にゴミ拾いをしようと自分に納得させての上であった。ところが体操が終わると、もうゴミはあらかた片づいてしまっていた。

弘子は自責の念があつたので女性に近寄り挨拶をした。「きれいにしていたくださりありがとうございます。気づきながら何もせずお恥ずかしい限りです」

「いえいえ、たいしたことではございません。皆さんが気持ちよく過ごしていただければうれいという自己満足だけですから。ゴミを置いて行かれた方は汚すつもりはなかつたと思います。やむを得ずの行為だったのでしょう。そ

れにゴミを置いていかれた人にも負い目があつたのだと思います。その証拠にカン捨てボックスの所に置いてあります。散らかしたのは恐らくカラスたちでしょう」

弘子はこの女性の寛容さと気遣いに驚いてしまい、まじまじと彼女の顔を見つめてしまった。

「何かボランティア活動でもなさっているのですか」

思わずそんな言葉が弘子の口から出た。

「いえいえ、何もやっていませんよ。普通の主婦です」
そう言いながら、何やら女性は困つたような表情になつた。

「どうかありませんか」

困惑している女性に弘子は声を掛けた。

「私ってドジなんですよ。いつもそうなの。実はゴミを拾つたのはいいのですが、こんな大きな袋をどうやって持つて帰ったらよろしいか困ってしまったの。まさかこんなに沢山のゴミになるとは思いもしなかつたものですから。それに、自転車であつては困ります」

見たところ、とても自転車に詰める量ではなかつた。女性に困惑するのは当然であつた。

「あっ、それなら心配ご無用ですよ。私が持ち帰りますから。私の自宅は直ぐ近くです。それに今日は折好くゴミの日ですから、どうぞご心配しないでください。このくらい

は私にもさせてください」

「そうですか、それではお言葉に甘えてお願いします」

そういうと女性は頭を下げた。そして、その頭を上げた時、視線が弘子のスカートに止まつた。

「ところで奥さんはいいていらつしやるスカートの模様は、もしかしてミシマサイコの花ですか」

興味深げに弘子に問うて来た。

「ミシマサイコという言葉は初めて伺います。実はこの模様は夜空に輝く星のつもりで染めました。ブルーの地色は夜空のイメージです。実は染色を趣味でやっておりますのでも、この星模様は糸の抑えが不十分で、その上染めもうまくいかず、絵もぼやけてしまいました。そのせいか花にも見えてしまいます。ところでミシマサイコってとても良い響きがしますね。しかも上品な感じがします。どんな花なんですか」

弘子はスカートの模様を右手でつまみ上げながら答え、また問うた。

「ミシマサイコは黄色の小さな花をたくさん咲かせるのです。線香花火の閃光が発散したように茎の先端に咲く花はいかにも可憐で初々しく、観る人の心を揺さぶります。この花の花言葉が『初めてのキス』というのも頷けます。昔、このサイコは相模野の原野を黄色く染め上げるほど咲き乱

れていたと言います。この様を江戸時代の蘭学者、渡辺崋山は、彼の日記に『柴胡の原ともよぶ』と記しています。また、松尾芭蕉もこのサイコの花を歌っています。しかし、残念なことに今はこの花は絶滅してしまいました。わずかに大学の植物園や愛好家が育てているだけです。私はこのサイコの花が再びこの地に咲き誇ってほしいと願って、ささやかな保存活動をしています」

弘子は女性のミシマサイコに関する知識の深いのも納得がいった。もつとこのサイコの話を知りたかつたが、朝食の準備が待っていた。弘子は自己紹介し、彼女の名前を尋ねた。そして、また会うことを約束をした。弘子はこの町が、この町の人が一層好きになつた。

サイコの話聞いて弘子は少し気持ちが明るくなつた。実は十日ほど前に定期健康診断を受診し、その結果が三日前に届いていた。結果、大便に潜血が見られ、四日後内視鏡検査をすることになっていた。弘子は、実母が三年前に大腸癌で亡くなっていることもあって、「癌」と聞くだけで胸が締め付けられるのである。夫に話をしたが、「癌と決まつた訳でもない。あまりよくよく考えることはない。心配し、ふさぎこんだ挙句、良性です」と判明したらその心痛は全くの悪あがきになつてしまふよ。そんな無駄はないの」と、歯牙にもかけない。夫の言い様は道理ではあ

るが、まるで他人事のような返答である。もう少し愛情のこもった言い方をしてほしいと、弘子は思った。
あまり丈夫でない夫は病院通いが多く、大腸や胃の内視鏡検査、腎臓結石などでの超音波検査と毎年受診している。その慣れもあってか、癌と聞いてもあまり反応しない。弘子にはそれが淋しく、つれなくも思い、懸念と憂いが深まるばかりであった。それだけに何の憂いもなさそうに柿の葉を掃いている夫がうらめしく、腹立たしくも思うのであった。しかし、それを夫にぶつける訳にもいかなかった。それはいかにも幼児めいていることと、さすがに弘子も理解できていたからである。

東彦はサイコの花のことを妻から聞いてあつと思つた。十年程前のことである。あるタウン紙に「わが街探訪」という連載記事を執筆していたことがあつた。「忘れ去られたわが街の花サイコ」と題してこのサイコを取り上げた。サイコの花の取材のために近くにある大学の植物園を訪ねた。そこでサイコの花についていろいろとレクチャーも受けた。しかし、そのことはすっかりと忘れてしまつていた。まさか突然にこの花が夫婦間で話題になろうとは思ひもしなかつた。何かしら因縁めいたものを感じずにはおれなかつた。しかし、早朝の忙しい時間帯である。「その花のこ

かつた。

東彦夫婦は結婚して直ぐに小田急相模原駅に近い東林間に住み、三年ほどしてこの地に移つた。そして二人の子を得た。末の子が生まれた時に、義母が共稼ぎしながら育児をする夫婦の大変さをおもんばかつて同居してくれた。割と社交的だつた義母はすぐに友人や詩吟のサークルを見つけ、この地に馴染んでいった。東彦夫婦たちは朝早く出勤し、夕方遅く帰宅することもあつて隣人以外はなかなか知り合いがでなかつた。しかし、義母の交際の広さのお陰で次第に親しい人々もでき、時にはバーベキューをやつたり夕食を共にすることもあつた。これらのことは子どもたちにも良い影響をもたらした。親同士が親しくなれば子どもたちも同士も仲良くなる。休みの日などには子どもたちの明るい声や笑いが響くのも日常のこととなつた。

感動話から四日ほど経つていた。東彦は自宅と仕事場の往復は電動自転車に頼つていた。仕事場と言つてもお金にもならない雑文を書いたり、小学生低学年数人の学習支援などをやっているにすぎない。しかし、人生の晩年を過ごすにはありがたい境遇であると感謝をしている。

自家用車は弘子の専用といつてよかつた。通常なら仕事場から住まいまではこの自転車ですら四十分間ほどである。と

と知っている」などと言おうものならば、何かと好奇心が強い妻は自分が納得のいくまで東彦を放さないのには目に見えていける。できるだけ花の話題をそらし、話を早く切り上げようと思つた。

「良い町の条件は幾つかあるけどやはり居住地に住む人々の人柄、住環境、交通の利便さだよね。幸い、この地区は自然環境に恵まれ隣人の皆さんも助け合い精神に満ちて、年を経るにつれ住み心地がよくなつていく。稲川さんのような方に知り合いになれたのは本当に良かった。さつき冗談交じりで『宝物でも見つけた』って言つたけど本当に宝物、心という宝を見つけたんだね」

東彦は先程の己の不遜さを詫びるように丁寧に言つた。弘子は満足そうに笑みをたたえていた。そして、手にしたゴミ袋をゴミ収集箱の中に入れた。時間が早いせいかわりんの網で四角に囲われた折り畳み式の収集箱にはまだゴミ袋が少ない。様々なゴミが詰め込まれたゴミ袋に、弘子はいつになく嫌悪感を持つた。ゴミ袋から自分を蝕む癌細胞を連想してしまつたのだ。そして、癌検査のことを思い出し、血の気がさつと引いた。しかし、夫の「癌と決まつたわけでない。気にするな。心配は病氣と分かつてからしよう」という言葉が思い浮かび、気を取り直した。そして「さあ、朝食の準備をしなきゃ」と呟きながら台所に向

ころがこの日は運が悪かつた。バッテリーが道半ばで切れてしまつた。その瞬間、まるで五^キほどの重りを両足にくくりつけたほどの負荷を感じた。力いっぱいペダルを踏んでもほとんど止まつた状態であつた。目にはそれとは知れないほどの上り坂でも東彦は尻を上下しながらペダルを踏む。が、上げた右足は凍結したように動かない。腹ただしいほどの難渋さであつた。悪いことは重なるものである。

自宅から十分ほどの大学近くを通過する頃には雨が降りだし、次第に本格化していったのである。自宅に着いたのは二時三十分であつた。いつもより三十分も余計に時間がかかり、その上全身びしょ濡れになつてしまつた。薄い肌着が皮膚に張り付き、体温を奪つていった。東彦は思わずブルと身体を震わせた。二日後には五月を迎える。しかし、相変わらずの異常気象続きで、四月とはとても思えない。

しかも三十度を超す日もあつた。この日も最高気温は二十五度であつた。しかし、雨で気温が下がり、濡れた身体は急速に冷えていった。東彦は湯沸かしポットのスイッチを入れると、急ぎ着替えをした。着替えが終わると同時にお茶を淹れ、湯飲み茶碗を両手で包み息を吹きかけ、吹きかけ茶をすすつた。茶は食道、胃の腑まで液体の感触をしっかりと刻みながら流れ落ちていった。身体はようやく温もりを取り戻した。

身体が温まるとテレビのスイッチを付けた。ホームドラマらしき画面が映し出されてきた。ぼんやりとその画面に視線を送った。テレビの下に置いた置き時計の針が三十分をさしていた。その時計への視線を窓へと移した。駐車場の先にはかろうじて公園の木々の緑が見えた。その緑は雨に薄れておぼろげではあったが、若々しい葉に覆われているのは認められた。

その光景に目を奪われていた東彦の左胸がドクンとなった。一瞬だがいつもと全く違う鼓動がしたのである。何か不吉な予感のようで言い知れぬ不安を感じた。東彦は確かめるように駐車場に再び目をやった。狭い庭のそのまた狭い一画が妙にだだっ広く見える。雨は強くなり、駐車場の屋根のビニルの板に当たる雨音が高くなっていた。

居間のテーブルに置いた東彦のスマホの着信音が鳴った。同時にブルブルという振動がテーブルのガラスを震わせていた。東彦は、はっとなってスマホを取るや画面を見た。

「あたしだけだ」

いつもの妻の言い様であった。しかし、言葉に力がない。東彦は何か悪いことが起きたのだと一瞬で悟った。以前に追突事故を起こした時の第一報の妻の低く重い口調と同じだった。東彦の身体が固くなった。妻の言葉を待った。

「ごめんなさい。事故を起こしてしまったの」

バスで行く難渋さが頭の中をかすめたのである。それに大した事故でもなさそうである。

「うん」

妻の応えは曖昧である。「来てとも、来ないで」とも言っていない。恐らく妻も雨降り天候のことをおもんばかっただけに違いない。なかなかいいところがあるな、と東彦は思った。

しかし、東彦は直ぐに「しまった」と思った。こんな天候だからこそ万難を排してでも妻の元に駆けつけなければならない、リップサービスでも「直ぐ行くよ」答えるべきだと思っただけである。しかも、交通手段は何もバスでなくタクシーを使えば良いのである。普段、タクシーを使うことはほとんどない東彦に「タクシーを使う」という発想が直ぐに浮かんでこなかったのである。

東彦はできるだけ明るい声で伝えた。

「タクシーで行くよ。少し時間が掛かるかもしれないけど待っていて」

「あ、ありがとう」

妻の口調が明らかに変わった。明るくなったのである。東彦は「やはり」と思った。最初から「直ぐ行くから」と、言うべきであったのだ。弘子は被害者である駐車

東彦は妻の言葉を飲み込んだ。短い沈黙が続いた。東彦は心の中で「やはり」と思った。体の中から力が抜けていく。

「人身事故？」と尋ね、続けて「けがは」と問うた。

「人身事故ではなく単独事故」。そして、「けがはないわ」と妻の言葉が続いた。

「よかった」という思いが体に満ちた。同時に、事故の処理や手続きなどのことが咄嗟に脳裏を走った。

「警察には連絡したの」

その問いに、妻は「それは今終わったところなの」と答えてきた。東彦は驚いた。警察への連絡どころか事情聴取が終わっていたのだ。妻は事故直後に電話を寄越した訳ではなかったのだ。東彦に遠慮して電話が遅くなったのかと思っただけ。しかし、それは大違いで直ぐに電話を掛けることなどとてもできる状況ではなかったのである。

東彦はともかくにも「事情聴取が終わった」ということを聞いて安堵した。警察の事情聴取がわりと早く終わったということは、それほど大きな事故ではなかったのだらうと解釈をしたからである。しかし、それも大きな間違いであり、甘い判断でもあった。

「それでどうする、私が行ったほうがいい？」

東彦の気持ちの中に雨降りの中、JR相模原駅近くまで

場経営者にはまだ詫びをしていなかった。変事を知った経営者が外に出て来た時には弘子はまだ車内に閉じ込められていた。車外に出た時には警察や救急車対応で会うどころの騒ぎではなかった。従って、弘子が夫の東彦と揃って詫びに訪れたのは事故車がJAFレッカー車に積み込まれた後であった。

「神様は楽に人生を歩ましてくれないものだ」。そう思いながら東彦は太いため息を吐いた。

実は一人娘の夫婦仲がかんばしくないのである。それどころか実態は離婚目前の危機状態なのである。娘の裕子も夫の仁も共に地方公務員である。ひとり娘であったせいかわがままに育ててしまった。妻はそうでもなかったのだが、東彦のかわいがりは尋常ではなく「猫かわいがり」を地でいくものであった。「ほしい」と言えばすぐに与え、「いやだ」と言えば簡単に受け入れてしまう。その結果、忍耐の「に」も知らないわがままに成長してしまったのである。東彦は大いに反省し、後悔をもしているのだが時すでに遅しであった。妻は「あなたがゆるいからよ」と責める言葉に、東彦は返す言葉がなかった。

裕子の夫の仁は穏やかな性格で、裕子の我儘をいつも受け入れ包み込んでくれる二人といたない伴侶と言えた。家事

も育児も娘以上にこなしている。ある時、娘と話していた折「しかし、仁くんは本当にいい夫だね。こんなに妻を大切にし、協力的な夫はいないよ」と褒めたことがあった。ところが娘の裕子が返してきた言葉は「おとうさんの言う『協力』は間違いよ。夫婦は元々平等で、主と副の関係を含む協力ではなく、共に主体たる共力のきよりよくであるべきよ。おとうさんの脳内にこびり付いている男性が主、女が従という考えとはもう決別すべきよ」と注意されたことがあった。しかし、それはそれとして「感謝」することは大事だよ、相手を尊敬し、感謝することは人間関係を築く上でとても大切だ、と東彦は優しく説いた。ところがそれに対する娘の返答は「良い夫だけでは物足りないのよね。もっと挑戦的に生きてほしいのよ」というものであった。東彦はその言葉に棘を感じるとともに、夫婦の危機がせまっているのではないかと恐ろしさを感じたのだった。その折の話はそれ以上は進まなかった。進まなかったというよりも、話を続けたならば東彦の恐れる言葉が娘の口から聞かされるのではないかと思ったのだ。それ故、東彦はあえて話題を逸らしたのだった。しかし、東彦の憂慮は消えるどころか次第に深まっていった。そして、結婚して八年目ごろから「つまらない男」とか「ポリシーのない風見鶏」と愚痴やら批判やらが多くなってきたのである。そ

の都度東彦夫婦は二人で娘を諫めてきた。しかし、裕子の不平不満は増すばかりであった。東彦は内心で「恐れた危機がどうとう来てしまったか」と思った。母親の弘子もさすがに「娘の我儘をゆるせない」とばかりに東彦とともに説き伏せた。しかし、無駄であった。二人は「もしや」と思い「ほかに好きな男性ができたのか」と恐る恐る尋ねた。しかし、「みくびらないで」と一笑された。さらにその上、「好きな人ができての離婚話だったら隠すことなく堂々と話すわ」ときっぱりと言いつつたのである。その明快さに東彦たちも納得し、安心もした。娘に一笑されたとしても娘の意向を安易に受け入れる訳にはいかない。その後も折を見て説得して来たが次第に聞く耳を持たなくなり「別れたい」の一点張りになってしまったのである。最近では「同じ空気を吸っているだけでも息苦しい」と言い出し始めたのである。さすがに事ここに至っては弘子も「そこまで感情が噛み合わないならしかたがない」と匙を投げだしてしまつたのだ。元々弘子には物を軽く、簡単に考える傾向がある。娘の件に関しても「なるようにしかならない」と、後はだんまりを決め込んでしまつている。

つれの修復は難しい。だからといって簡単に投げ出してしまつてよい話ではない。東彦にとつては娘もさりながら、孫も可愛くて仕様がな。親の勝手で孫が辛い思いをすることだけはなんとか避けて欲しい。しかし、ことが夫婦間の愛情問題となれば親といえども軽々に介入できるものではない。だが、夫婦という長い期間には紆余曲折が、また波風が立つのは当たり前のことである。むしろ無いと言うことが不思議なくらいである。多くの夫婦はそういう苦難を乗り越えて夫婦関係を保つて来ているのである。東彦にはわがままとしか見えない娘の不満も少し時間をかければ改善するのではないかと自分の経験を重ねて思うのである。時を重ねて行けば結婚当時のような愛情は保たれないとしても、情はむしろ深まっていく。娘の裕子のように短慮であれば夫婦で育て上げた果実を生涯得ることはないだろう。東彦は「排除ではなく少しでも受け入れる気持ちを持って」と説得するが、裕子は聞き入れようとしないのである。傲慢とも不遜とも思えるわが子の態度に東彦は怒りよりも哀れさを感じてしまつたのである。

教えて分からないのであれば自ら代償を払って体得しなければならぬ。東彦は自らを省みて深く感ずるのであった。それにはやはり忍耐と譲歩が必要である。東彦は父親として娘がもう少し努力をしてほしいと願うのである。さ

らに結婚生活では子どもの問題がある。子どもも一個の人格である。両親の都合、勝手に決められては不満この上ないだろう。東彦は一人孫の恵美が愛しくてならない。両親の離婚によつて恵美が取り返しのでない精神的打撃を受けることをひどく恐れた。「小学校二年生の娘の立場や離婚後の経済的事情も考慮しなければいけないよ。それに両親が離婚することによつて恵美が人間不信や心の病などになったら取り返しがつかないだろう」と、改めて言い聞かせた。

「あの子は意外とメンタルが強いよ。それに私たち夫婦のことをよく言い聞かせてあげるから心配ないわ。むしろお互いが意に添わないままずるずると一緒にいることの方が不健康だし不健全だと思つて。お互いの精神にもよくないことね。また、離婚はおとうさんが考えるほど悲劇ではないのよ」と、裕子は歯牙にもかけない。それに、という言葉に東彦は驚きを隠せなかった。裕子は「離婚はそれほど大ごとではないのよ。どうしても厭なら分かれる。これって今では普通のことよ。子どもだって両親を失う訳ではない。都合をつけて互いに会うことは当然なのよ。おとうさんは家族関係に縛られ過ぎよ。というより夫婦、親子関係に呪縛されて身動きが取れなくなつて

いるのよ」、というのである。何事にも絶対がないのは道理である。一度結ばれた夫婦関係もどんなことがあっても全うするというのも不変ではない。東彦は思わずウーンと唸ってしまった。時代が変わった、とそう思った。が、どうしても娘の言葉には納得がいかなかった。

「離婚後どうするのか」

離婚に伴う経済的な問題は外すことができない。娘の離婚が現実的になりつつ現状で、このことはどうしても確認しておかねばならなかった。

「おとうさんたちと住むわ。どうせ部屋もあまっていることだし、それに孫と一緒にならおとうさんたちも幸せでしょう」と、気軽なものである。

東彦としては可愛い孫の恵美と一緒に生活するのは悪いことではない。妻と二人きりの生活では会話も少ない。しかし、恵美と一緒にするには必ず笑いが起こる。それに東彦たち夫婦関係も良好になるのである。それは何事にも代えがたいものと東彦は思っている。時には腹を抱えて大声で笑うこともある。だが、周りの大人の都合で子どもから父親を奪うことにはどうしても抵抗があった。一方、夫婦だけの静かな生活に慣れてしまった身に、娘、孫とは言え、新たな人間関係を無難に作り出していけるかという別な不安もあった。「良いこと取りのちよい付き合い」と二十四

ている。若い時の一トンの重みは今や五トンにも相当する。それは同時に耐性の弱体化ということでもある。哀しいが、命あるものは必ず衰え、死ぬ。東彦としてその運命から逃れられない。そのことを直視すればいらぬもめごとは避け、平穩に過ごしたいという気持ちには真実であった。

この先の短い人生を考えると、嘆きで闇を染めるのは得策ではない。安寧が何よりである。親の嘆きを少しでも感じ取ってほしいと思うのだが、今の娘には到底無理だろうと東彦は悲しくなるのだった。

「私は貝になりたい」という映画があった。C級戦犯で処刑になった者の言葉である。この言葉に倣うなら、東彦は「私はサイコの花になりたい」という言葉が浮かぶのであった。しかし、サイコは人間の強欲で絶滅させられたのだ。その根が生薬として役立つために人間によって乱獲され、分布地域が土地開発で人間の住処に変えられたのである。基本、人間は自己中心なのである。裕子の我儘も東彦夫婦にその責の一端がある。

弘子が事故を起こした場所は有料駐車場の入口の所であった。そこは駐車券が発券され、それを手にして入場するゲート式と呼ばれるものである。その駐車場はボーリング場とリサイクル店との共用の駐車場であった。

時間まるまるの接触とは全く違う。気に入らないので賃貸契約を解消しますという訳にはいかない。しかも最近、新しい環境に挑戦するとか創造するという気力が減退し、薄れていくのをとみに感じるようになった東彦である。それだけに慣れ親しんだ環境や生活慣習にどっぷりと浸っていることが楽であるし、それを今更ながらに手放したくないのである。それに可愛い孫と言えども同居ともなれば互いの粗も見えて来るのは自明である。良かれと思つての同居が逆に険悪な関係になったならこんな不幸なことはない。そこまで考えると東彦は安易な妥協をしてはならないと思うのだった。

傍から見たら贅沢な悩みと思われてしまうかもしれない。しかし、悩みというものには客観的な秤というものはない。そのことを東彦はつくづく実感している。同居問題は正式に娘の裕子から相談を受けたわけではない。実際に相談された段階で考えればよいこともある。細々とした些事に心を取られるのも老いのせいなのかと吐息を漏らしてしまふ。

それにしても人生晩年に娘の離婚問題に直面し、苦勞するとは少しも思わなかった、と溜息をつく東彦であった。人生いつ、どこでどんな異変や災害に突然出遭うか分からない。しかも、既に老境である。心を覆う被膜も薄くなっ

東彦がタクシー料金を支払い、降車すると、発券機の側に立っている弘子の姿が見えた。四、五分先であった。たいては広くもない黄色いシートの屋根が弘子の頭上を覆っていて雨除けの機能を果たしていた。東彦は手を上げた。彼女も応えて手を振ってきた。わずかに笑みが見えた。夫の顔を見て安心したのかもしれない。東彦が驚いたのは回りに弘子以外誰もおらず、彼女がぼつんと一人で立っていたことである。自動車事故なので、物見高い人々がいるのではないかと予想していたからである。

「事故処理はもう済んだの」

「ええ、警察官と救急隊員からの事情聴取も簡単に終わったの。それとJAFにも連絡したわ。でもまだ駐車場の会社にはお詫びには伺っていないの」

「じゃあ、これから行こうか」

「そうしてもらおうとありがたいわ」
弘子はほっとしたような表情をし、東彦に向かって軽く頭を下げた。

東彦はそんな謙虚な妻の態度に少しばかり気の毒に思つた。そう思いながら東彦は何かにつ張られるように横を向いた。東彦は目に入って来た光景を見て思わず「あっ」と声を上げたしまった。車はゲートの中程に左側を下にして横倒しになっていたのである。普段目にするこ

排気管や車の下底を無残に晒している。四月四日にS自動車営業所として受け取ってわずか二十五日しか経っていない。東彦は我が身を痛めたような思いであった。悲しくもあった。

「ごめんなさい」と、弘子が東彦の側に寄って来ると言葉掛けてきた。東彦のショックを感じ取ったのだろう。入口ゲートの広さは幅が二メートル、縦の長さがせいぜい四メートルほどである。そんな狭い面積の中で車がひっくり返ることは東彦にはとても信じられなかった。「どう運転したらこんな風にひっくり返るのか」と、東彦は妻に聞いたかった。しかし、それはどうしても詰問調になってしまいうに違いない。意気消沈している妻にはむごすぎると東彦は思った。しかも妻を責めても新車が返ってくるわけでもなく、事態が帳消しになるわけでもなかった。そう思うと東彦はその言葉を飲み込んだ。

「どうしてこんなふうに横転してしまったのか、私にはさっぱり分からないのよね」

東彦の気持ちを忖度したわけではないだろうが、弘子から東彦の疑問を口にして来たのである。

「咄嗟のことで事態を飲み込めないということはよくあるよ。恐らくブレーキとアクセルを踏み間違えたのかもしれないよ」

である。また、医師にしても検査結果がはっきりしないのに断定したことは言えない。どうしても医師の言葉は曖昧な表現になってしまいがちである。

弘子もこの例に洩れず、医師の「癌の恐れ」を切り取り「癌」と解釈し、さらに「癌に違いない」と決めつけてしまったのである。その結果、気持ちが落ち込んでしまったのである。意気消沈してしまった弘子は、雨天という人の気持ちを暗くしがちな気候も重なり、ブレーキとアクセルの操作の間違いを起こしてしまったのかもしれない。

弘子も確かに踏み間違いをしてしまったという自覚はあった。しかし、そのことを夫には言えなかった。言えば一週間前の再検査の通知から話を始めなければならなかったからである。そうなれば夫に隠していた「再検査」のことや「生体検査」のことで洗いざらい話さなければならぬ。当然「隠し立て」をしていたその理由まで詳らかにしなければならぬ。弘子にとっては至極気の重い話であり、また夫婦間に溝を作る結果になる恐れもある。そう考えると、今はその話を伏せ、単なる踏み間違えという話のままにして進めるのが穏当であると思ったのである。

「起きたことは仕方ない。しかし、人身事故でなくて本当によかった」

という言葉に、弘子は涙がこぼれそうになった。その言

弘子は夫の言葉にうなだれてしまった。確かに夫の言うようにブレーキとアクセルを踏み間違えたと思う。しかし、なぜかその言葉を口にはできなかった。「しつかりとサイドブレーキを引いておけば」という後悔の念を深くするだけであった。

「起こってしまったことは仕方がないよ。それにしても人身事故でなくて本当によかった」

その言葉は東彦の正直な言葉であった。弘子は東彦のその優しい言葉に涙が出そうになった。

しかし、弘子には夫に言えないことがあったのである。

この日、午前中に再検査ということで大腸の内視鏡検査があった。病気が判明する前に「大腸癌検査がある」と騒ぎ立て、夫を心配させることはない。検査結果で「癌」と判明した時点で話そうと思っていたのである。幸いにして癌でなければ、後で笑い話として夫に話せばよいのである。

検査結果は明確なものではなかった。三個のポリープを切除したが、内視鏡では取り切れない大きなポリープがあり、生検を行うというのである。生検とは、生体から病変の疑われる組織の一部を採って顕微鏡で観察することである。

医師は「癌の恐れはあまりないと思いますが、念のため生検を行います」ということであった。しかし、多くの患者がそうであるように病に関しては何い方に解釈しがち

葉に東彦の思い遣りが込められていると感じたからである。「私も本当にそう思うのよ。母が助けてくれたのかも知れないわ」

涙を見せなくなかった弘子は、敢えて話題を変えた。

「えっ、おかあさんが。どうして」

東彦はいつもの妻の飛躍かと思った。

「母が亡くなる前に『弘子に何かある時には必ずあなたの夢枕に立つからその時は注意してよ』と言ったのよ。昨夜、母が何かを叫んでいる夢を見たけど、このことの忠告だったのね。母の遺言をもっと大事にしないといけないかったわ」

「その話は初めて聞くけど、おかあさんはそれだけきみのことを心配していたのだね。おかあさんが亡くなってもう十一年経つけど、あの世にいても娘のことを心配してくれているのだ。ありがたいことだ」

弘子の母のテルは、東彦たちの長男が生まれた時から家族と同居し、子どもたちの世話から家事まで献身的に尽くしてくれていた。東彦夫婦は小学校の教員同士であったが、その仕事を全うできたのも義母のこの力添えによるものであった。

「迷信などと言ってバカにしたり無視していた夢枕などということも人の生き方を正してくれたり、助けてくれたり

することがあるのね」

「そのとおりだよ。要是夢も占いも自分たちの人生にどう生かすかということだね。解釈により益にも害にもなることだから」

そう言いながら東彦は改めて状況確認するために車の回りを見た。通常、車は入口ゲートに入り、発券機の前で停車する。そして、運転席のウインドーを下ろし、発券ボタンを押す。その後駐車券が出てきてそれを受け取る。同時に、前方の降りていたゲートバーが上がり、車は入場できる。

当然ながら弘子はこの手順を踏んだはずだ。問題があったのは発券ボタンを押した時か、駐車券を受け取った時かだろう。発券ボタンを押す操作は簡単である。特別無理な姿勢を取ることもない。従ってこの操作は事故原因から除外できる。運転が上手とは言えない弘子は、発券機から距離を置いて駐車した可能性が高い。発券機と運転席の間が手を延ばした長さの範囲であれば、駐車券を難なく取ることができたに違いない。逆に伸ばした手が発券機に届かないとすれば窓から身を乗り出さなければならなくなる。上半身はシートベルトに固定され自由に身動きができない。その結果、上半身をよじり、体と右手を伸ばさただけ伸ばすことになる。その時、ブレーキペダル踏んでいた右足が

慣れが定着し、会話などもありきたりのものになり、深く話し合うことも少なくなっていたかもしれない。今更ながらに後悔する東彦であった。

発券機や遮断機が設置してある場所は車道より二十センチほど高い。車はその高さを乗り越えて一層ほど先の遮断機に激突した。遮断機はゲートバーを支える役目を負っている。H鋼のような鉄製である。その鉄製の支柱がへこみ、前方に二十度ほど傾いていた。急発進した車は縁石を超えた時に大きくバウンドしたのだろう。しかも、左側にハンドルを切っていた可能性が高い。従って縁石に激突したときの車の姿勢は右側が左側より高く浮いていたと思われる。その姿勢のままに遮断機の支柱に激突した車は一層右側が高くなり、結果的に左側を下にした形で路面に横転してしまつたと推測できるのである。

横転している車は雨にそぼ濡れ、誠に痛ましく東彦には思えた。見たところ、支柱に激突したと思われるフロントにへこみは見えただが、その他の損傷は確認できなかった。ただ、左側面が底になつたためサイドミラーはぐしゃりやつぶれ、痛々しかった。

東彦が不思議に思つたのは運転席のエアバッグが作動しなかつたことである。勢よく支柱に衝突し、あまつさえ横転したのに作動しなかつたということは、発進してから

ずれ、アクセルペダルの上に乗ってしまったのかもしれない。

しかし、足がアクセルペダルの上に乗ってしまったことに気づけば大事にはならなかつた。だが、悪い時には悪いことが重なるものだ。券を取り出すことに集中していた神経はそのことに気づかず、車を前進させるためにアクセルペダルの上にあつた足を踏み込んでしまったのである。

その他、原因として考えられるのは心理的な問題である。真つ先に浮かぶのは娘の離婚騒動のことであり、それに連しての娘たちとの同居問題である。また、娘が離婚して実家に戻つて来たという話はあつたという間に近隣にひろがることは必定である。「他人の不幸は蜜の味」と言われる。口さがない人たちへの格好の話題提供になつてしまつただろう。弘子は、普段から世間の噂などど吹く風と平然としていても、その内面は必ずしもそうとは言えない。外見からは窺い知れないほどの悩みとなつていった可能性も考えられる。これらの懸念事項がひよいと脳裏に浮かんで、運転が散漫になり、事故につながつたということも考えられる。東彦は夫としてそのあたりの妻の心理などをしっかりと把握し、ケアをしておくべきだったのかもしれない。夫婦生活は既に五十年に近い。しかし、お互いの心情をしっかりと理解し、お互いの不足を補いあつて来たかと問われれば必ずしも十分ではなかつた。また、長い夫婦生活の中で、

衝突するまでの距離が短すぎたのか、または東彦が思つたほど衝撃が強くなかつたか、あるいは両方の原因が重なつたかのいずれかと思われる。

「新車なのに本当にかわいそうなことをしてしまつたわ。ごめんさいね」

東彦と一緒に見て回つた弘子は神妙そうに呟いた。車に謝つているのか東彦に謝つているのか判然としなかつたが、悄然と雨に打たれている弘子の姿に東彦は哀れさを感じた。

「この車大丈夫かしら」
「大丈夫というと、まだ乗れるということ？。それは難しいかもしれないなあ。修理したとしても百万円は間違いなくオーバーすると思うね」

東彦の言葉に妻はすつかり気落ちしてしまつたようだった。

「購入したばかりでまた買い替えなんていうことになつたら大変だね。もう新車は無理ね」

弘子はか細い声でポツリと言つた。

「でも、けがもなく、人身事故でもなかつたのだからよかつたよ。おかあさんが守ってくれたのだ。それに全損と認定されたら全額保証されるはずだからお金のことは心配しなくていいかもしれないよ」

「全損つて全額損害補償ということ」

「そうだよ。万一のことを考え、全損保証を含んだ保険に加入しておいたのだよ」

この言葉に弘子の表情がぱっと明るくなった。「あなたありがとう。これで安心したわ」

弘子の感情の起伏は激しい。また、単純でもある。お金の心配がなくなつた途端に全てが解決したかのような喜びようである。しかし、今後待ち受けているだろう被害者への謝罪、保険会社との話し合いや雑多な事務手続き、交渉を考えると、東彦は弘子のように樂觀的な気分にはなれなかつた。書類の作成や修理会社などの交渉は全て東彦が担つていかねばならないのは自明であり、その覚悟もできていた。そのことを考えると、気が重く沈んでいった。

「ところでこの横転した車からどうやって脱出したの。難しかったらうね」

「それがあなた、すごかつたのよ。感動ものだったのよ」妻の顔が突然生き生きとなつた。しかし、その言には相変わらず掴み所がない。

「バーンというかドカンという音がしたと思つたら、私は横倒しになつていたのでよね。少し経つて気づいたのだけど、私が横倒しになつていたのではなく、車がまるごと横倒しになつたの。必然、私も横倒しになつた訳だけど。とにかくシートベルトがしっかりと身体に食いついていて、

に横転した車から救助されたのよ。命の恩人よ、あの方たちは」

案の定、弘子は堰を切つたようにしゃべりだした。「車が横倒しになつた後、駐車場にいた人たち全員が車の回りに集まつてきて、私に声を掛けてくれたの。『大丈夫ですか』、『しっかりとしてください』、『窓を開けた方がよいですよ』とか。気が動転していたものだからその声にどう返答してよいか分からなくなつて、ただ『うん、うん』と首を振つただけだったのよ。そのうち屈強な男性二人が車に乗り上がつてきて窓を叩き、『ドアの鍵を開けて』叫んでいる声がしっかりと聞こえたのよ。しかし、その解錠のボタンがどこかさっぱり分からないのよ。なにしろあなたも知つているように私は機械音痴でしょう、しかも、購入して間もない車だから解錠のボタンがどこにあるかなど皆目わかりやしないの。そうしたら、車の傍にいたもう一人の男性が窓ガラスに掌をくつつけて凄腕勢いで下へ押し込み始めたのよ。すると窓ガラスが少しずつ下に落ち始めたの。上部にわずかな隙間が出たのを見て、もう一人の方がその隙間に指を突っ込んだのよ。そしてガラスを押し下げ始めたわけ。するとみるみるうちにガラスは下がっていったの。さらに開いた空間から手を入れ、ドアのロックを解錠してくれたの。しかし、その後が大変だっ

私は椅子と一体化していたの。そのお陰でけががなかったのよ。もし、シートベルトがゆるかつたり、締め忘れていたら身体が座席から投げ出されていたと思うわ。そうなら少なくとも打撲、最悪の場合、骨折は免れなかつたはずだわ。しかし、身体がシートベルトに括り付けられて横倒しになるというのはとにかく不安定で、怖いよ。手足は自由だけど頭部や胴体は不自由なの。ただ手足をばたばたとして、裏返しになつた亀のようにもがいている状態ね」

「それでどうやって脱出したの」

弘子の話は、いつも円の外縁を際限なくぐるぐると撫でまわすような捉えどころがなく、冗長なものなのである。中心部たる核心になかなかたどり着かない。聞き役の東彦にはまどろっこしくて仕様がなない。「早く結論」をと急かすと、「夫婦の会話を大事にしないのね」と不機嫌になる。そんなことで、最近「うん、うん」と相槌だけはしっかりと打つて、後は聞き流すようにしている。しかし、今はゆつくりと聞く場面ではない。だが、弘子のこの饒舌は、身の内に溜まつた澱を吐き出しているのかもしれない。この際、きれいに吐き出させることが肝要なことだと、東彦は理解した。

「それよ、そこなのよ。私が感動したのは。私は男性三人

たの。私の身体からシートを外すことがね。その際の三人の連携が見事だったのよ。一人の方がドアを開いてそのドアを締まらないように支え、もう一人の方が私の身体を押さえつけていたシートベルトを外してくれ、さらにもう一人はシートベルトを外している男性を下から支えてくれていたの。ところが、シートベルトが外れば私の身体は支えを失い下へ落下してしまうわけ。そうならないように私の身体を押さえ付け、何とか車外に出し、外で見守つていた男性に引き渡してくれたのよ。しかし、この後も大変で、横倒しの車の外に出たのはよいけれど、地面まで一層ぐらいはあつたかしら、そこから飛び降りることは到底無理で、またまた男性たちに助けていただき無事に降りることが出来たのよ。命を救われたも同然で感謝しても感謝しきれないわ。それにその男性たちの一人が『奥さん、本当に命拾いをしましたね』というのよ」

唐突な男性の言葉に弘子はどきりとなつた。そしてその男性の顔に目を注いだ。その彼の表情は真剣そのものであつた。

「火災を起こさなくてよかつたですね」

弘子は一瞬キョトンとなつた。車がひっくり返つただけでどうして火災が起こるのか皆目見当がつかかつたのである。

「どうして火災になるんですか」

弘子の疑問に男性は囁んで含めるようにゆっくりと話し始めた。

「奥さんが命拾いをしたというのは本当のことなんです。車が衝突したり、横転したりすると燃料タンクが破損することがあるんです。また、車にはバッテリーが積み込まれています。バッテリーは電気を供給する箱です。ここから送られた電流がショートすることがあります。ショートしますと火花がでます。この火花が流れ出たガソリンに着火すると、一瞬で火災が起ります。そうしますと車内に閉じ込められた人はこの炎に巻き込まれるか、二酸化炭素中毒で命を失ってしまいます。これを避けるには直ぐにエンジンスイッチを切ることなんです。しかし、咄嗟のことでずと直ぐにそこに頭が回ることはむずかしいですが。いざれにしても今回の事故はいくつかの幸運が重なっていましたよ。火災発生を除いても大けがの可能性もありましたからね。しかし、奥さんには幸運の女神さまがつかっているのではありませんか、傷ひとつなかったのですから」

「そういうとその男性はにこりとした。浅黒く日焼けした顔の開いた口からこぼれた歯はとても白く、そして健康そのものに見えた。

弘子はこの男性の話を聞いているうちに足が震えて来た。

ずきりと痛んだ。

今日の検査に先だつて病院から食事制限などの話の他に、車では来院しないようにと言われていたのだった。

その指示を無視した拳句の今日の事故であった。自宅から病院までは車でほんの七、八分の距離であった。また、リサイクルセンターの店から注文していた椅子がようやく入荷したという知らせもあった。病院から店まで車で五分とかからない。弘子は「近いし大丈夫だろう」と安易に考え、車を使用したのであった。弘子には普段から慎重さに欠けるところがあった。もっと強く言えば傲岸不遜な態度である。このような態度は改めるよう夫から強く言われていたのである。弘子は夫のこの戒めを思い出した。しかし、時すでに遅し、だったのである。そしてまた、今になって自分のこの軽率妄動を夫に告げることがとてもできないことであった。改めてこの度の事故は天からの強い警告、諫めであったと受け止め、今後の教訓とする必要があるとしみじみと思った。

「世の中には本当に親切な方がいらつしやるのね。ありがたい、ありがたい。ところでその方たちのお名前は伺っているんだろうね」

東彦は妻が癌検査のことや自動車の運転が禁止されていることなど勿論、知る由もなかった。ただ妻の幸運と人々

洗車さえ満足にしたこともない弘子にとって、車にも火災が起きるなどと言うことは初耳であり、心胆寒からしめる出来事であった。

「幸運も奥さんの日頃の行いがよかったからでしょう」

「そう言いながら先程の男性が雨に濡れた頭髪を両の手で撫で上げ、そしてその濡れた手を振って水を飛ばした。それに応えるように二人の男性たちも「よかった、よかった」と笑顔で互いに見合った。

弘子の話を聞いた東彦は、この男性たちの身を呈しての救済活動に感激するとともに、深い感謝の念が湧いて来た。「世の中には目を逸らすような凄惨な事件がある一方で、見知らぬ人たちが総がかりで人命を救うような優しさに満ちた出来事もある。日本はまだまだ捨てたもんじやないね」

東彦は心からそう思った。実際、一歩間違えたなら葬式の準備をしなければならぬ事態でもあったのだ。

弘子は弘子で、運転する者の責任、義務というものを改めて自覚した。ちよつとした心の揺れ、惑いがとんでもない事故につながることを実感したのである。一瞬の心の隙が重大な結果をもたらすことを自覚しておれば発券時の自分の動作も自ずと慎重になっていたに違いない。そうすればこんな大事故を起こさなかつたのだらうと思った。心が

の親切心がありがたく思うのであった。そして、胸をぽつと撫で下ろした。

夫の言葉に弘子はたくましい男性たちの姿を目に浮かべた。

「それよ、だれだと思う」

「たつた今起こつた反省の心など忘れたかのように、弘子は膝を叩かんばかりだった。

「突然そんな風に言われても見当がつかないけど」

東彦は妻の感情の起伏の大きさに少し戸惑う。

「驚かないでね。相模原のラグビーDチームの人たちだったのよ」

「それはびつくりだね。ラグビー選手じや力持ちに間違いないね。偶然とは言えこれ以上ない巡り合わせだったね。天祐という言葉がびつたりだね。しかし、きみは本当に運がいいねえ。見事に横転した車なのに中のきみは怪我ひとつない。しかも、駆け付けた救急車はカラで帰つたというから。これは後々までの語り草になるね。これはこれとしてDチーム三人の方々へは私からもしっかりとお礼をするよ」

「そうしてくれる。名刺を頂いているから」

妻は五郎丸選手の活躍がテレビで放映されて以来、ラグビーのわかファンになっていた。それだけに自分を救出

してくれた人たちが地元相模原のラグビーチームのメンバーであったことに興奮を隠せなかったのだ。
「偶然とは言え、この出会いは天からの計らいかも知れないわ。大事にしないと」
この思いがけない巡り合わせは、意気消沈している弘子には何よりも明るい材料であった。彼女の言葉には真実味がこもっていた。

しかし、親切な人はラグビーチームの三人だけではなかった。妻が救出作業を受けている間に、心配して集まった人たちの中のだれかが進んで救急車要請をしてくれていたのだ。ちょうど妻が車の中から助け出され、ほっと一息入れているところに救急車が到着したのであった。救急隊員から問診などを受けたが、身体はどこにも異状がなく、救急車は直に帰っていった。また、パトカーで警察官数名駆けつけてきたが、私有地での物損事故ということで、これも簡単な事情を聞かれただけで終わった。

「しかし、皆さん本当に親切な方ばかりで助かったね。この相模原には人を思い遣る気風が満ちているのかもしれないね」

「あなたのいうとおりだわ。公園での出会いもそうだったけど、皆さん本当に優しい人々ばかりだわ。受けた恩は返さないといけないわね」

にも支障をもたらしたのは東彦の側である。「駐車場が使えず商売がったりですよ」と怒鳴られても何の文句も言えない東彦たちである。ところが話を始めるや否や、加害者である弘子への労りの言葉であった。弘子もその温情には心を打たれた様子であった。心が少し軽くなった東彦は妻に代わり今後の弁償のことについて話をした。保険会社に言われた通り、事故の一切については保険会社が対応してくれることを社長に話した。何か異論が出るのではないかと東彦は緊張した。しかし、彼はすんなりと理解を示してくれた。

ただし、半導体の不足でボールなどの修繕は長くかかり、その間、警備員を立てねばならない。従ってかなりの出費を要するであろうことは告げられた。当然のことであると東彦は承知をした。

東彦夫婦は社長に改めての詫びを申し述べ、階段を下りた。足取りは軽かった。

「良い方だったわね。怒られると思ったのに、優しい言葉を掛けてくださるものだから私、涙がこぼれたわ」

「同感だね。開口一番の思い遣りの言葉には心が打たれてしまったよ。世の中にはお釈迦様のような人が本当に実在するのだね。またまた人の温情に接したね。弘子がラッキーなのか相模原の住人に奇特有な方が多いのかのどちらかだ

妻の表情はいつになくしおらしくであった。
これらの親切心は一粒の麦みたいなものだと思つた。蒔かれた麦は次に新しい実をたくさん結実し、次の人の手に渡る。その人もまた種を蒔く。それは優しさのリレーのようなものである。優しさとは争いのない世界でもある。

人情の有り難さが身に沁みたのはこの後も続いた。

二人は駐車場の経営者に謝罪をするため、駐車場と道路ひとつ隔てて建つビルに向かった。肩を打つ雨が強く感じられた。二人とも再び重い気分を襲われていた。開口一番非難の言葉をぶつつけられるのではないかと戦々恐々の心理状態であった。階段を上るとすぐにボーリング場特有の響くような乾いた音が二人を襲って来た。妻が事務室の開いているドアをノックし、来意を告げた。事務員から少しホールで待つように言われた。待つ間もなく社長が現れ「お待ちして申しわけございません」と、丁重な言葉を掛けてきた。東彦は自分たちがいうべき言葉を先に言われて驚いてしまった。妻が簡単な自己紹介をし、次にお詫びの言葉を述べながら深々と頭を下げた。東彦もそれに続いた。

「奥さん、おかげはございませんでしたか」

社長の言葉に東彦は再び驚かされた。迷惑を掛け、営業

ろうね。あるいは両方もありだね」
「それはやっぱり相模原市民に情の厚い人が多いっていうことよ」

次々に遭遇する優しい人々に、弘子は公園で出会った稲川光子のことを思い出した。すると、彼女の言った野原一面に黄色く咲き乱れていたという柴胡の花の情景が浮かんで来た。その情景と出会った優しい人たちのことが重なった。

光子は語っていた。

サイコの花は一つ一つが小さく可愛いらしい。可憐と言ってもよい。しかし、野の花のせいaka地味とも言える。だが群れて野原一面に咲き誇ると黄色の絨毯を敷き詰めたように見え、その景観は「目に綾」そのものだったという。

弘子は光子のこの話と、これまで弘子に優しく接してくれた人々とどこか繋がるように思えた。弘子には見たことのないサイコの景色でありながらも、これまでの親切心を持って接してくれた人々はまるで優しいサイコの花ではないかと思つた。その優しさが紡がれ、弘子を包み込んでくれるのだと思えた。自分もこの優しさの繋がりに入らなければと思つた。

駐車場に戻った弘子は、横倒しのまま雨に濡れている車

の姿が否応なしに目に入って来た。やはり胸が痛んだ。「かわいそうで気の毒で車の姿を直視できないわ」

弘子は額に立て皺を寄せていう。

「そうだね。せめて少しでも早く起こしてあげたいね」

東彦もくぐもった声で言いながら天を仰いでいる。雨は少しばかり小降りになったとは言え、止む気配はない。

二人はそんな話をしながらJAFの係員を待ちかねていたら、まるでその声が聞こえたように青地に黄色のクレールが目立つレッカー車がゆっくりと姿を現してきた。

「まるで以心伝心だね」

そう言いながら、弘子は今思い出したばかりのサイコの花の色とレッカー車の色と同じことに偶然ではないものを感じた。

「日頃の良い行いのお陰かもね。しかし、狭い隙間に横倒しになってしまった車をどうやって起こすのかしらね」

そう言いながら東彦は、「これでは車を傷つけずに引き出すことはできないな」と思った。そして「やはりこの車にはもう乗れない」と寂しく思った。

一一〇〇ccという小さな排気量車ながら走行時の安定感、ブレーキの利き、加速度といい申し分なかった。この車で南伊豆の友人宅に行くのを楽しみにしていた東彦だっ

ね」

弘子は悲しそうな声で尋ねる。

「仕方ないです。ゲートの機械を犠牲にするか、それとも車かの選択です。奥さんはどうしますか」

「それは車ですね。やはり」

弘子はまるで苦いものを飲み込むような表情であった。弘子には車の修理代が脳裏をかすめたに違いない。

「奥さんのところは当然ながら自損事故の賠償保険も加入していますね」

「ええ、勿論です。全損事故の補償も加入しています」

東彦は妻に代わって稲川に答えた。

弘子は計数にも保険契約などの煩雑な内容にも疎い。全て夫に任せていた。常に妻の運転に不安を覚えていた東彦は、多少出費が増えても安心を買ったのである。

「購入価格の六割以上の修理代であれば全損扱いですからこの車の修理には少なくとも百五十万円はかかると思いますが」

「えっ、そんなにかかりますか」

「左側面は全部やられていますし、右側面、そして正面も毀損しています。エンジンも何らかの損傷があると思えます。全損補償で間違いありません。分かり易く言えば、新車と交換ということですよ」

た。弘子ならずとも東彦までも肩ががっくりと落ちる思いであった。

駐車場に止めたレッカー車から降りた社員は二人に歩み寄って来た。そして軽く頭を下げ、名刺を東彦と弘子に手渡した。それには稲川裕貴と氏名があった。ツナギ服に包まれた身体は引き締まっており、三十代半ばに見えた。東彦はその名刺に覚えがあるように思えた。しかし、稲川が直ぐに仕事の段取りの話に入ったため、名前への詮索は消えてしまった。

「これはむずかしいなあ」

稲川は独り言を言っている。

「むずかしいって何がむずかしいのですか」

稲川の言葉を聞きつけた弘子は早速聞き返している。

彼が困惑したのは車が横転してしまった場所が狭すぎるというところである。起こして起こせないことはないが、起こしたときに車が券売機などのマシンにぶつかる可能性が大きい。そんな事態になればマシンの修理代が更に増える。また、車の破損も増し、車の修理代も増えるということなのである。

「引っ張り出すしかないですね」

彼の結論であった。

「引っ張り出すことは車を更に傷める、ということですよ」

「新車がまた無料で手に入るということですか」

「そういうことです」

弘子はポカンとして黙りこくってしまった。信じられないことなのである。

「保険料は高くなったけど、補償をしっかりとしたものにしておいたのだよ。しかし、まさかこんなに早く恩恵に浴するなんて思いもしなかったな。決断してよかった」

東彦も専門家である稲川の「全損補償」という言葉にさすがにほっとした。

「あなたのお陰だわ。感謝感激よ」

妻の感謝の言葉に東彦は笑顔で応えた。

「それでは作業に取り掛かります。レッカー車を事故車の正面にもって来て、引き出します。作業中何が起こるか分かりませんので車の側から離れていてください」

稲川はてきぱきと処理していく。東彦は好感の持てる若者と思った。

レッカー車を移動し正面に止めると鎖を引き出し、それを事故車のフロントに繋いだ。そして、その鎖をゆっくりと巻いた。ガリガリと舗装された地面と車の側面がこすれる音が響いた。弘子は耳をふさいでいる。東彦も心臓がえぐられるような気持ちになった。引き出された車はいとも簡単に引き起こされて、元の立ち姿に戻った。東彦はその

姿に凛々しささえ感じた。

二人は改めて車の左側面を見た。サイドミラーは完全に潰れ、側面は幾筋もの無残な横傷がつき、塗装は側面全部に亘って擦れ、剥げ落ちていた。素人目にも修理するよりも購入した方が安いと見えた。さすがに東彦はがっかりとしてしまった。

「ところで車の修理工場はどこにしますか。修理をするかしないかは別にして、事故車はどこかに運ばなくてはなりません」

稲川はてきばきと応対して、無駄がない。

「それはそうですね。今日は何曜日だったかな」

東彦は弘子に問いかけた。

「確か火曜日よ。どうして」

「S自動車の営業所は確か火曜日が定休日だったね。そうすると営業所には運べないな」

東彦は弘子の言葉を待たずに、

「心当たりがありませんので稲川さんの会社の指定工場をお願いします」

と、答えた。

「それではちよつと遠くなりますが、津久井になります。

そちらまで運びます。赤十字病院のすぐ近くです」

東彦は稲川の言葉に、屋上の看板にあった鮮やかな赤い

十字を思い出した。現職の頃、その近くの合同庁舎に会議で幾度か行ったことがあったからである。懐かしく思い出された。

「それでは出発しますから、レッカー車の運転席に乗ってください」

稲川は明るい声で二人を促した。東彦は中央席、弘子が助手席に座った。

橋本五差路の手前を左に折れて車は進んだ。片側二車線の道路が続く。新しい道路である。東彦にとってこの道を通るのは初めてであった。

「やはり随分と景色が変わったのね。こちらの道路を通るのは十数年ぶりかしら。そのころはもつと畑や森があったと思うけど。もう建物だらけね」

弘子は先の見通しがついたせいとか、口調が明るくなり、口数も多くなつて来た。

「十数年と言いますと、まだまだ畑や林など一面に広がっていただけからね。今じゃ想像もつきません。それにしても奥さんは幸運でしたね。あれだけの車の損傷がありながらがは一つもないのですから」

稲川も気楽に弘子に応えている。

「事故の前後のことは記憶がないのです。しかし、落ち着いてよく考えたら、ブレーキとアクセルの踏み違えたのね。

皆さんにご迷惑をお掛けして本当に申し訳なく思っています。実は夫には言っていなかったのですが、認知症が原因になつてたのではと、凄く心配しているんです」

弘子は事故の解決の見通しが立ち、気持ちも軽くなったので本音をポロリと漏らしたのだろう。認知症による事故となれば今後の弘子の生活そのものにも大きく影響して来る。弘子だけではない。夫の東彦にも子どもにも迷惑を掛けることになる。

「奥さん、認知症の件は心配ありませんよ。僕の経験、それに知識から言えるのは、認知症の人は原因を自分ではなく、他に求めます。例えば車の欠点だとか歩行者が急に飛び出してきたとかです。奥さんはペダルの踏み間違えと最初から自分の非を認めております。それにほんのわずかの時間ですが、こつこつと話をして来て会話に全く支障がありません。僕は医者ではありませんので断定はできませんが、奥さんは認知症ではありません。心配しないでください」

「うわあ、よかった。安心したわ。本当に心配していたのよ、稲川さん。あなたは車ばかりでなく人間も救うのね。ステキだわ」

弘子は躍り上がらんばかりの喜びようであった。そして、臆面もなく夫の前で若い男性を褒め上げた。

「弘子が稲川さんの隣でなくてよかった。もし、隣であつたら運転中にも拘わらず抱きついていたかもしれない。それで事故になつたらシャレにならないからなあ」

東彦は半ば呆れ返りながらそんなふうにした。しかし、口には出さなかった。その代わり、

「実は私もちよつと認知のことは心配していたんですよ。しかし、そんなことを口にしたら妻のプライドを傷つけるのではないかと黙っていたんです」

「いやあご主人は優しいんですね。こんな思い遣りのある男性はなかなか少ないです。僕も見習いたいです」

「そんなふう褒められたら恥ずかしいですよ。穴があつたら入りたくらいです」

そう言いながら東彦は頭を掻いた。しかし、内心ではうれしかった。褒められると言うことは子どもも年寄りも同じだと思つた。いや、褒められることの少ない老人の方がむしろうれしさは大きいと思つた。

「あなたも結構良いところがあるのね。見直したわ」

弘子も稲川に同調するように言つた。運転席の雰囲気も心なしか明るく、温かな感じになつて来た。

「事故を起こしますと家族間とか夫婦間まで悪影響を起こすことが多いですよ。お宅さんたちのように明るく、しっかり会話までされるといふことはとてもすばらしいこと

です。今後ともあまりよくよすることなく、プラス思考で行きましょう。それに、事故処理や被害者の方への対応は保険会社にお任せすればいいのです。解決まであつという間に過ぎてしまいますよ」

稲川の言葉に嘘はなかった。この後の被害者との交渉は全て保険会社が行ってくれた。しかも、交渉の進捗状況、損害費用の支払いなどその都度報告があった。東彦たちが被害者への挨拶をしたのは全てが円満に終了した後だった。稲川の言葉は東彦と弘子の気持ちを随分と楽にしてくれたようだった。そして、「まとも心優しい方に会えた」と、弘子は思った。

「ありがとうございます。そう言っていたいただいて気持ちも軽くなりました。ところで稲川さんはどちらにお住まいですか」

「ええ、田名の方です。相模川の近くで自然環境はすばらしいです。それに人情が厚く住み良いところです。結婚するまでは淵野辺駅近くでしたが」

弘子の問いに稲川は気楽に答えてくれている。

「えっ、私たちの住まいと近いところだったのね」

弘子はそういうと、さらに言葉をつないだ。

「実は、つい最近、稲川さんという方と知り合いになりましたのよ。とてもステキな方で、その方とご関係あるのでは

はないかと先程からずつと考えていたのよ。その方からミシマサイコの花のことを教わり、とても印象に残ったのです」

東彦は妻も同じことを考えていた。結婚して長いこと同じ屋根の下で生活をして来たせいか思考回路が似て来ている。東彦は、夫婦というものは知らず知らずのうちに影響し合い、似たもの同士になって行くのかも知れない。

「知り合った方の名前は光子さんといいます。稲川光子さんです。サイコの花を復活させようと努力されているとお聞きしました」

「えっ、僕の母ですよ」

弘子の言葉に稲川は大声を上げた。

「驚いたなあ」

三人が同じ言葉を発した。

「奥さんたちもミシマサイコに関心があるのですか」

「お恥ずかしいのですが、おかあさんからお聞きしてからのファンです。にわか愛好者です」

弘子は恥ずかしそうに手を口元に当てた。

「妻からあなたのおかあさんのお話を聞いて私も関心を持ち始めました。妻があなたのおかあさんと知り合いになったのは淵野辺公園です。おかあさんが散らかっていたゴミを拾っていた時だそうです。そんな姿に感動して妻が声を

掛けたのですよ」

「ゴミ拾いもサイコの花の保存活動もすばらしいボランティア活動ですね。私は心から感心し、感動したのです」

弘子の言葉には実感がこもっていた。

「母がその話を聞いたらきつと喜びますよ。緑と花のある環境を子孫のために残すのが私の務めだ、と常々口にしていきますから」

稲川は前方を見る目を離さずに応えた。その表情には笑みが浮かんでいた。

「人は生きがいや使命感を持って生きていると輝くのですね。そればかりか周りの人にもよい影響を与えてくれます。おかあさんは本当にステキな方です。お知り合いになつてうれしいです。それにこうして息子さんにもお会いでき、お世話になるなんて何か運命のような気がします」

「奥さんのおっしゃるとおり不思議なご縁ですよね。よその方が私たちの出会いを聞いたら作り話と笑うかもしれませんが、人生には思いがけない出会いというものがあるのですね」

東彦も、稲川のいうこの度重なる偶然には心底驚いてしまっていた。

こんな会話をしているうちに稲川と東彦夫婦たちの距離は一挙に縮まった。雨は依然として止まず、大山、そして

丹沢山塊の山並みは雲に隠れて見えなかった。しかし、運転席には三人の弾んだ会話が續いていた。

「母が私が小学校低学年の頃からサイコの花に関心を持ち、その話をよく聞かせてくれました。そのお陰で私もサイコに関心を持つようになりました。母は『銀河に星々、地にサイコ、人に思い遣りの輪と和』がモットーでいつも聞かされて来たのです。お陰でその言葉は私の座右の銘にもなつてしまいました」

「ステキなおかあさんに、ステキな息子さん。それにすばらしいモットー。私、またまた感動してしまいましたわ。

こんなステキな人たちが住む中央区を自慢したいわ。おかあさんのモットーを中央区の街のスローガンにしてもいいわね。それにこの御縁はサイコの花が結んでくれたのかも知れません。どうぞおかあさんに、渡辺が会いたがつているとお伝えください」

「ええ、しっかりと伝えます。母もこの奇縁をきつと喜ぶでしょう」

稲川はそういうと、弘子に顔を向けてにこりとした。

弘子も笑顔で応えた。運転席の三人とも心が弾み、温かな空気に包まれているようであった。

東彦もほっとし、心が和んでいくのを覚えた。意識はしなかったが緊張していたのだ。ほのぼのとした心に、晩夏

に咲くというサイコの黄色い花が浮かんだ。しかし、人間が我欲で滅ぼした花が人間同士を暖かく繋いでくれることに寂然としない気持ちも湧いて来るのだった。むしろ償いの気持ちの方が強くなるのであった。

車はカーブの多い道を安全運転で進んでいた。山裾から高台へと車は進む。フロントガラスの向こうには林と家々が混在する風景が広がっていた。その中でひと際目立つビルが見えた。屋上に付設された看板には赤十字の赤いマークがくっきりと見えた。目的地に近づいて来たのだ。いつしか雨は小降りになっていた。山裾から湧きだした雲が白く、長く、横にたなびいている。その背後には重畳たる山並みが奥深く続いていた。

相模原市立博物館研究報告「ミシマサイコはいつど
のように相模原から絶滅したか」(P 71～P 76)
秋山幸也

参考文献